

乳幼児突然死症候群の育児環境因子に関する研究

—保健婦による聞き取り調査結果—

(分担研究：乳幼児の突然死等の実態把握に関する研究)

田中哲郎¹⁾、加藤則子¹⁾、土井 徹²⁾、
市川光太郎³⁾、中川 聡⁴⁾、宮坂勝之⁴⁾

1) 国立公衆衛生院母子保健学部

2) 国立公衆衛生院保健統計・人口学部

3) 北九州市立八幡病院小児科

4) 国立小児病院麻酔科

要約：乳幼児突然死症候群（SIDS）の育児環境因子を明らかにするために総務庁より人口動態調査票の目的外使用許可を得て、SIDS児およびその対照児に対し、平成10年1月から2月末にかけて全国で保健婦による聞き取り調査を行った。

その結果、死亡児(SIDS)は対照児に比べ次の育児環境因子で発生率が有意に高いことが明らかになった。①寝かせ方については、うつぶせ寝があおむけ寝に比べ高く、そのオッズ比は3.00(P<0.001, 95%信頼区間2.03~4.64)であった。②栄養方法については、人工栄養児が母乳栄養児に比べ高く、そのオッズ比は4.83(P<0.001, 95%信頼区間2.73~9.48)であった。③喫煙については、両親が喫煙していると高く、そのオッズ比は4.67(P<0.001, 95%信頼区間2.14~12.54)であった。

今回の調査結果より、SIDSはうつぶせ寝、人工栄養児、両親の喫煙により3.00~4.83倍多く発生すると結論された。

見出し語：乳幼児突然死症候群、SIDS、育児環境因子、聞き取り調査、うつぶせ寝、喫煙、母乳、人工栄養、保健婦

はじめに

乳幼児突然死症候群(Sudden infant death syndrome: SIDS)は、最近の人口動態統計¹⁾²⁾において乳児死因の第3位で、その死亡数は平成7年が579、平成8年が526となっており、子どもの健全育成上大きな障害となっている。

また、欧米などではSIDSとうつぶせ寝などの育児環境因子との関連があるとされ、うつぶせ寝をやめるようにとのキャンペーンが行われている。

このため、わが国でも寝かせ方などについて保健医療関係者や保護者の一部に混乱がみられている。しかし、わが国では、乳幼児突然死症候群について若干例の報告³⁾⁴⁾がみられるものの全国規模の調査は行われておらず実態は明らかでない。

以上のことより、SIDS症例およびその対照について分析を行い、SIDSと育児環境因子について検討し、今後のSIDS予防のための保健指導の基礎資料とすることを目的に調査研究を行った。

方法

対象は、SIDS死亡例は平成8年1月から平成9年6月末までの間に死亡し、厚生省人口動態統計において乳幼児突然死症候群(R95)と分類された837症例とした。対照児の選定にあたっては、まず性別を同一とし、次に同一市町村の中で生年月日になるべく近いものとした。生年月日の幅を広げた場合、同一市町村内では異なる月にまたがってしまう場合、生年月が同じとして同一保健所管内の近隣の市町村に広げた。出生票上で選定した対照が転出等で不在の場合は同じ手順で条件

を広げて別の対照を選定した。生年月日が1ヵ月以上離れたものは、解析から除いた。

総務庁より指定統計(人口動態調査票)の目的外使用許可(平成9年12月1日付、総承統333号)を得て、保健所に保管してある死亡票より死亡児の氏名、死亡年月日、住所地のリストを作成し、調査対象とした。

対照児は、条件に適合する児を保健所に保管してある出生票より選定した。

調査に当たっては、対象者がSIDSで子どもを亡くした者であることへの配慮と、協力者へのプライバシーの保護に留意することなどを調査員に指示した詳細な訪問調査マニュアルを作成した。また、調査対象者へは本調査の主旨の書かれた文書を渡し、調査に同意したものに対して行った。

調査実施時期は平成10年1月から2月末とし、回収は研究班が都道府県等の母子保健主管課を通じて行い、集計は国立公衆衛生院母子保健学部で行った。

調査事項で、死亡児と対照児間の比率の差の有意性を検定するに当たっては、以下の方法でMc Nemar(マクネマー)検定を行った。

選択肢

		対 照 児	
		要因あり	要因なし
死亡児	要因あり	a	b
	要因なし	c	d

順位尺度となっている各質問の選択肢があるところで区切り(例①と②に回答したものは「要因なし」、③④に回答したものは「要因あり」など)、要因ありと要因なしに分け、上記のような集計表を作成した。患児・対照児ともに要因ありの回答をしているペアはa組、患児のみ要因ありの回答をしているペアはb組、対照児のみ要因ありの回答をしているペアはc組、どちらも要因ありの回答をしていないペアはd組である。

マクネマーの検定は以下の方法で検定統計量を算出して行った。

$$\chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$

これが帰無仮説(比率に差がない)のもとに

近似的に χ^2 分布に従うことをもとに有意水準を判定した。また、発症に対して要因がどれだけ相対的に危険であるかを知るために、オッズ比と95%信頼区間を求め有意性の検討を行った。

統計ソフトはSPSS6.1 for windowsを用いた。

結果

調査対象837名のうち、転居で調査不能となったもの107名を除いて、回答組数(平成10年4月20日現在集計分)は423組であった。その内、対照児の性別が異なるもの、対照児の生年月日が1ヵ月以上間隔のあるもの、記載が不完全であるもの46組を除く377組を分析対象とした。

I. 単純集計結果

1. 地域別回答組数

地域別回答組数は北海道が10組(2.7%)、東北が29組(7.7%)、関東が99組(26.3%)、中部が98組(26.0%)、近畿が32組(8.5%)、中国が32組(8.5%)、四国が8組(2.1%)、九州・沖縄が69組(18.3%)の合計377組であった(表I-1)。

2. 県別回答組数

県別回答組数は表I-2に示したとおりである。回答が多く得られたのは愛知県が37組、埼玉県が25組、福岡県が22組、千葉県が21組、静岡県が15組などであった。また全例に有効回答が得られたのは、青森、鳥取、徳島、香川の各県であった。

3. 性別

死亡児(SIDS)の性別は男が223名(59.2%)、女が154例(40.8%)で合計377例であった。対照例も死亡児例と同一であった(表I-3)。

4. 死亡年齢

死亡時期として最も多い月齢は2ヵ月ちょうどから満3ヵ月未満の56例(14.9%)で、ついで4ヵ月ちょうどから満5ヵ月未満が51例(13.5%)、1ヵ月ちょうどから満2ヵ月未満が45例(11.9%)などであった。また、出生から満6ヵ月未満が261例(69.2%)で3分の2を占めていた(表I-4-1)。また、死亡児(SIDS)と対照児の生年月日の日差は、表I-4-2に示した。

5. 出生体重

出生体重は死亡児(SIDS)は1,500g未満が18例(4.8%)、1,500~2,000g未満が16例(4.2%)、2,000~2,500g未満が46例(12.2%)、2,500~3,000g未満が137例(36.3%)、3,000~3,500g未満が120例(31.8%)、3,500g以上が40例(10.6%)であった。

一方、対照児は2,000g未満が10例(2.7%)、2,000~2,500g未満が17例(4.5%)、2,500~3,000g未満が136例(36.1%)、3,000~3,500g未満が166例(44.0%)、3,500g以上が48例(12.7%)であった。死亡児(SIDS)では2,500g未満が80例(21.2%)、対照児では27例(7.2%)であった(表I-5)。

6. 在胎週数

在胎週数は死亡児(SIDS)では24~27週が7例(1.9%)、28~31週が14例(3.7%)、32~35週が20例(5.3%)、36~39週が222例(58.9%)、40~43週が113例(30.0%)、無回答が1例(0.3%)であった。対照児は24~27週が2例(0.5%)、28~31週が2例(0.5%)、32~35週が8例(2.1%)、36~39週が214例(56.8%)、40~43週が151例(40.1%)であった(表I-6)。

死亡児(SIDS)は36週未満が41例(10.9%)、対照児は12例(3.2%)であった。

7. 解剖の有無

解剖の有無では、解剖実施は95例(25.2%)、未実施が277例(73.5%)、不明が5例(1.3%)であった。(表I-7)。

8. 死亡月

平成8年1月から平成9年6月までの月別死亡数は11例から38例であったが、平成8年6月より10月はやや少なかった(表I-8)。

9. 死亡時刻

死亡時刻は午前中が219例(58.1%)、午後が156例(41.4%)、無回答2例(0.5%)であった。また、午前2時より午前9時までが多く、午後8時から午前1時が少なかった(表I-9)。

10. 栄養方法

栄養方法では、母乳栄養は死亡児(SIDS)が80例(21.2%)、対照児が148例(39.3%)であった。混合栄養は死亡児が118例(31.3%)、対照児が105例(27.9%)、人工栄養

は死亡児が155例(41.1%)、対照児が100例(26.5%)などであった(表I-10)。

11. 発育状態

死亡児(SIDS)の死亡時点までの発育状態は、問題なしが271例(71.9%)、何か言われたことがあるが95例(25.2%)であった。同時期までの対照児の発育状態は、問題なしが329例(87.3%)、何か言われたことがあるが42例(11.1%)で、死亡児(SIDS)は対照児に比べ発育状態について何か言われたことがあるものが多くみられた(表I-11)。

12. 習慣的喫煙

子どもを妊娠してからの習慣的喫煙の有無は、父母ともに喫煙ありは死亡児が86例(22.8%)、対照児が30例(8.0%)、父のみ喫煙は死亡児が187例(49.6%)、対照児が214例(56.8%)、母のみ喫煙は死亡児が6例(1.6%)、対照児が5例(1.3%)であった。父母共に習慣的喫煙なしは死亡児が92例(24.4%)、対照児が125例(33.2%)などであった(表I-12)。

13. 頸定(首すわり)

頸定(首すわり)は、死亡児(SIDS)が226例(59.9%)、対照児が253例(67.1%)であった。未頸定は死亡児が148例(39.3%)、対照児が123例(32.6%)であった(表I-13)。

14. 首すわり時期

頸定の時期は2ヵ月が死亡児41例(18.1%)、対照児28例(11.1%)、3ヵ月が死亡児119例(52.7%)、対照児156例(61.7%)、4ヵ月が死亡児46例(20.4%)、対照児59例(23.3%)であった(表I-14)。

15. 寝返りの有無

寝返りの有無については、自由にできていたものは、死亡児(SIDS)が110例(29.2%)、対照児が132例(35.0%)、できはじめは死亡児が44例(11.7%)、対照児が35例(9.3%)、まだできなかったは死亡児が218例(57.8%)、対照児が208例(55.2%)であった。また、亡くなった当日にはじめて寝返りができた児が3例(0.8%)みられた(表I-15)。

16. 寝返りの時期

寝返り時期について、保護者よりの回答では、4ヵ月未満は死亡児が17例(15.5%)、対照児が6例(4.5%)、4ヵ月は死亡児が19例(17.3%)、対照児が37例(28.0%)、5ヵ月は死亡児が22例(20.0%)、対照児が38例

(28.8%)、6ヵ月は死亡児が35例(31.8%)、対照児が36例(27.3%)、7ヵ月は死亡児が9例(8.2%)、対照児が10例(7.6%)などであった(表I-16)。

17. 普段の寝かせ方

普段の寝かせ方については、うつぶせ寝は死亡児が98例(26.0%)、対照児が58例(15.4%)、あおむけ寝は死亡児が229例(60.7%)、対照児が286例(75.9%)、横向きは死亡児が7例(1.9%)、対照児が6例(1.6%)、一定せずは死亡児が37例(9.8%)、対照児が24例(6.4%)などであった(表I-17)。

18. 寝方を自身で変えることの有無

寝方を自身で変えることの有無については、ほとんど変えなかったは死亡児が224例(59.4%)、対照児が206例(54.6%)、変えることがあったは死亡児が65例(17.2%)、対照児が93例(24.7%)、よく変えたは死亡児が62例(16.4%)、対照児が56例(14.9%)などであった(表I-18)。

19. 部屋の室温

子どものいた部屋の室温は、他の部屋に比べてどうでしたかの質問では、死亡児では高かったが11例(2.9%)、やや高かったが45例(11.9%)、同じが252例(66.8%)、低かったが31例(8.2%)などであった。

対照児は高かったが10例(2.7%)、やや高かったが88例(23.3%)、同じが242例(64.2%)、低かったが25例(6.6%)などであった(表I-19)。

20. 衣類や寝具類

おさんが身にまとっていたもの(衣類や寝具類)は大人の着ていた枚数に比べてどうでしたかの質問に対して、死亡児は厚着だったが10例(2.7%)、やや厚着だったが43例(11.4%)、同じが238例(63.1%)、薄着だったが67例(17.8%)などであった。

一方、対照児では厚着だったが9例(2.4%)、やや厚着だったが58例(15.4%)、同じが174例(46.2%)、薄着だったが125例(33.2%)などであった(表I-20)。

21. 死亡した日の就寝時の寝かせ方

子どもが死亡した日の就寝時の寝かせ方はうつぶせ寝が128例(34.0%)、あおむけ寝が215例(57.0%)、横向きが10例(2.7%)、覚えていないが9例(2.4%)などであった(表I-

21)。

22. 死亡前の変化の有無

死亡当日または数日前よりの変化の有無は変化がみられた児が200例(53.1%)、みられないと答えたものが171例(45.4%)、無回答が6例(1.6%)であった。

変化のみられた200例の内訳は寝かせ方を変えたが14例(全症例中3.7%)、哺乳力が弱かったが26例(6.9%)、活気が弱かったが18例(4.8%)、下痢をしていたが12例(3.2%)、発熱が26例(6.9%)、鼻閉が16例(4.2%)、風邪気味だったが87例(23.1%)などであった(表I-22)。

23. 異常発見場所

死亡児の異常発見場所は、自宅が307例(81.4%)、保育所・託児所が19例(5.0%)、その他が49例(13.0%)であった(表I-23)。

24. 異常発見時の体位

異常発見時の体位はうつぶせが180例(47.7%)、あおむけが147例(39.0%)、横向きが14例(3.7%)、覚えていないが13例(3.4%)、その他が19例(5.0%)、無回答が4例(1.1%)であった(表I-24)。

II. 検定結果

(1) マクネマーの検定

調査事項について、死亡児(SIDS)と対照児の間で比率に差があるかどうかの検定をマクネマー検定で行った。

1. 出生体重

出生体重を2,499g以下と2,500g以上に分けて検討を行ったところマクネマー検定統計量 $\chi^2=33.383$ で、2,499g以下が死亡児に有意($P<0.001$)に多かった(表II-1)。

2. 在胎週数

在胎週数36週以下と37週以上に分けて検定を行ったところマクネマー検定統計量 $\chi^2=19.938$ で、在胎36週以下が死亡児に有意($P<0.001$)に多かった(表II-2)。

3. 寝かせ方

普段の寝かせ方について、①〔うつぶせ〕と〔あおむけ〕の間で検定を行ったところ、うつぶせ寝では、死亡児(SIDS)が対照児に比べ $\chi^2=11.112$ で有意($P<0.001$)に多かった。②〔うつぶせ・横向き〕と〔一定せず・あおむけ〕③〔うつぶせ〕と〔うつぶせ以外(あおむけ・一定せず・横向き)〕④〔うつぶ

せ・一定せず〕と〔横向き・あおむけ〕⑤〔あおむけ以外(うつぶせ・一定せず・横向き)〕と〔あおむけ〕に分けて検討を行ったところ、うつぶせ寝を含む寝かせ方では死亡児(SIDS)が対照児に比べいずれも有意($P<0.001$)に多かった。⑥〔横向き〕と〔あおむけ〕の間には差がなかった(表Ⅱ-3-a)。

また、死亡した日の寝かせ方について、①〔うつぶせ〕と〔あおむけ〕の間で検定を行ったところ、うつぶせ寝では、死亡児(SIDS)が対照児に比べ $\chi^2=29.008$ で有意($P<0.001$)に多かった。②〔うつぶせ〕と〔うつぶせ以外(あおむけ・一定せず・横向き)〕③〔あおむけ以外(うつぶせ・一定せず・横向き)〕と〔あおむけ〕に分けて検討を行ったところ、うつぶせ寝を含む寝かせ方では死亡児(SIDS)が対照児に比べいずれも有意($P<0.001$)に多かった。

4. 栄養方法

栄養方法について、死亡児と対照児間に母乳栄養、人工栄養、混合栄養で差がみられるかの検定を行った(表Ⅱ-4)。

〔人工〕と〔母乳〕に分け両者間に差がみられるかについてマクネマーの検定を行ったところ、検定統計量 $\chi^2=28.929$ で死亡児に人工栄養が有意($P<0.001$)に多かった。

また、〔人工・混合〕と〔母乳〕の間、および〔人工〕と〔母乳・混合〕間にも同じ傾向の有意差がみられた。

5. 両親の習慣的喫煙

子どもを妊娠してからの両親の習慣的喫煙の有無について死亡児と対照児の間で検定を行った結果、〔父母共喫煙有り〕は、〔父母共喫煙なし〕に比べ死亡児(SIDS)に有意に多くみられた($\chi^2=12.971, P<0.001$)。また、〔父のみ〕と〔なし〕は $\chi^2=1.398$ (NS)、〔母のみ〕と〔なし〕は $\chi^2=0.250$ (NS)、〔少なくとも父母のいずれかに喫煙有り〕と〔父母共喫煙なし〕は $\chi^2=7.262$ ($P<0.01$)であった。(表Ⅱ-5)。

6. 寝返りの有無

寝返りが〔自由にできる〕と〔できはじめ・まだ〕間で検定したところ、死亡児の〔できはじめ・まだ〕が $\chi^2=7.603$ ($P<0.01$)で多かったが、これは死亡児(SIDS)の発達

が遅いことによると思われる。〔自由にできる・できはじめ〕と〔まだ〕を分けると $\chi^2=1.191$ で、両者間に有意な差はみられなかった(表Ⅱ-6)。

7. 寝方を自身で変えることの有無

寝方を自身で変えるかについては、〔ほとんど変えなかった〕と〔変えることがあった・よく変えた〕に分けると、死亡児(SIDS)では〔ほとんど変えなかった〕が $\chi^2=5.510$ で有意($P<0.05$)に高かった。

また、〔ほとんど変えない・変えることがあった〕と〔よく変えた〕に分けると有意な差はみられなかった(表Ⅱ-7)。

8. 部屋の室温

子どものいた部屋の室温は、他の部屋と比べて①〔高かった〕と〔同じ・低かった〕②〔高かった〕と〔それ以外(やや高め・同じ・低かった)〕③〔高かった・やや高め〕と〔低かった〕④〔高かった・やや高め〕と〔それ以外(同じ・低かった)〕⑤〔高かった・やや高め・同じ〕と〔低かった〕に分けて検定したところ、④〔高かった・やや高め〕で死亡児が有意($P<0.001$)に少なかった(表Ⅱ-8)。

9. 衣類や寝具類

子どもが身にまとっている衣類や寝具類は大人の着ているものに比べて、①〔厚着〕と〔同じ・薄着〕②〔厚着〕と〔それ以外(やや厚着・同じ・薄着)〕③〔厚着・やや厚着〕と〔薄着〕④〔厚着・やや厚着〕と〔それ以外(同じ・薄着)〕⑤〔厚着・やや厚着・同じ〕と〔薄着〕に分けて両者間の差をみると、⑤〔厚着・やや厚着・同じ〕で死亡児が有意($P<0.001$)に多かった(表Ⅱ-9)。

(2) オッズ比

主な項目のSIDS発症オッズ比を表Ⅲに示した。

①寝かせ方については、うつぶせ寝はあおむけ寝に比べ高く、そのオッズ比は 3.00 ($P<0.001, 95\%$ 信頼区間 $2.03\sim 4.64$)であった。②栄養方法については、人工栄養児は母乳栄養児に比べ高く、そのオッズ比は 4.83 ($P<0.001, 95\%$ 信頼区間 $2.73\sim 9.48$)であった。③喫煙については、両親が喫煙していると高く、そのオッズ比は

4.67(P<0.001,95%信頼区間2.14~12.54)であった。

考察

欧米各国では育児環境因子、特にうつぶせ寝、母乳、喫煙との関連に関する多数の報告があり、うつぶせ寝をやめるようにとのキャンペーンが行われ、それによりSIDSの発生率が減少したとの報告がされている。

しかし、わが国においては少数例の報告があるもののこれらの点について結論を出すだけの信頼あるデータが不足していた。一方、保健指導の現場などでこの点についてどのように指導を行うべきかについて一部で混乱がみられていた。

SIDSは国や人種などにより発生頻度に大きな差がみられることより、外国におけるデータだけをもとにして保護者へ寝かせ方などについて指導することは問題があるのではないかとの考えもあり、わが国におけるSIDSの実態を至急明らかにする必要があると考えられた。

平成7年よりICD-10の使用により死因選択のルールおよび死因順位に用いる分類項目の変更が行われた。このことにより、SIDSの発生状況は厚生省の人口動態統計を利用することにより実数や死亡率などを知ることができるようになった。しかし、育児環境因子は、死亡診断書にこれらの点の項目がないことより、死亡診断書の内容からそれらを明らかにすることはできない。育児環境因子を明らかにするための方法の一つとして病院調査が考えられた。しかし、この方法では短期間で多数のデータを集計することは難しい。以上のことより人口動態調査票を利用し、保健所の保健婦による聞き取り調査が現状では最も課題を早期に解決できる方法と考えられた。

実施に当たっての問題点として、SIDSで子どもを亡くした家族に対して再びその当時のことを思いださせる調査は辛いので避けるべきではないかとも考えられた。しかし、もし、SIDSの発生に育児環境との関連因子の関与があり、このまま調査をしないことにより今後、不幸な子どもが存在することはあってはならない。また、多くの情報が流されていることより、多くの保護者に不安を抱かせることは避けるべきと考えられたので、家族

へ十分な配慮をすることと、プライバシーを守ることを徹底させて調査を行うこととした。このため、調査員に対してSIDSの家族の気持ちを書いた本などの参考資料を提供するなどと同時に、詳細な訪問調査マニュアルなどを作成し調査を行った。聞き取り調査の際には、死亡児の面接時間の方がかなり長いことが想像される。これは、死亡児の方が設問内容が詳しい分時間をとっただけでなく、つらい質問であるがゆえの配慮として、質問の進め方には時間をかけて注意深く行われたためである。

今回の調査結果より、死亡児(SIDS)は対照児に比べ次の3つの育児環境因子が有意に高いことが明らかになった。

①寝かせ方についてはうつぶせ寝があおむけ寝に比べ高い。②栄養方法については人工栄養児が高い。③喫煙については両親が喫煙しているものが高いとの結果であった。

しかし、うつぶせ寝のオッズ率は外国での報告⁹⁻¹²⁾の5.4~11.7など(出生早期の特定時点で算出されたものを除く)に比べ、わが国の値は3.00でやや低かった。

喫煙については、外国での報告⁹⁾¹⁰⁾¹²⁾のオッズ比が2.5~8.5位とされており、わが国の値の4.67はこの範囲に含まれていた。

人工栄養は外国での報告¹¹⁾¹²⁾が2.0~7.7とされており、わが国の値の4.83はこの範囲に含まれていた。

また、室温、衣類・寝具については、質問自体が抽象的で、質問設定に多少難があったかもしれない。

今回の調査にあたって、SIDSで子どもを亡くし、調査に御協力頂いた皆様に心から深謝します。

また、貴重な御助言を頂いた平成9年度厚生省心身障害研究SIDS研究班の諸先生、および全国で困難な調査を実際に行ってくださった保健所職員をはじめ御協力頂いた全ての関係者に深謝します。

文献

- 1)厚生省大臣官房統計情報部：平成7年人口動態統計、平成8年
- 2)厚生省大臣官房統計情報部：平成8年人口

動態統計、平成9年

- 3) 渡辺 登、坂上正道、八代公夫他：神奈川県下における乳幼児突然死症候群(SIDS)の発生状況-県下医療機関へのアンケート調査から-、日本小児科学会雑誌、96；1219-1224、1992
- 4) 西川嘉英、古谷悦美、梶本吉孝他：当院における来院児死亡の病理所見から見た乳幼児突然死症候群の分析、日本小児科学会雑誌、100；199、1996
- 5) 吉永宗義、仁志田博司：乳幼児突然死症候群症例における育児環境のアンケート調査、日本小児科学会雑誌、100；201、1996
- 6) 吉永宗義：乳幼児突然死症候群(SIDS)発症の背景としての育児習慣に関する研究-特に就寝時の姿勢と寝返りの影響について-、平成8年度厚生省心身障害研究報告書、1997
- 7) 戸莉 創、加藤稲子、宮口英樹：寝かせる時の体位がSIDSの発症に関与するか否かに関する調査研究-わが国の一般社会における乳児の睡眠環境に関する調査-、平成8年度厚生省心身障害研究報告書、1997
- 8) 水田隆三、山中龍宏、市川光太郎他：乳幼児突然死症候群(SIDS)の全国調査-臨床例についての中間報告-、平成8年度厚生省心身障害研究報告書、1997
- 9) Oyen N, Markestet t, Skjaerven R, et al. Combined effects of sleeping position and prenatal risk factors in sudden infant death syndrome, the Nordic epidemiological SIDS study. *Pediatr* 100:613-621.1997.
- 10) Wennergren G, Alm B, Oyen N, et al. The decline in the incidence of SIDS in Scandinavia and its relation to risk intervention campaigns. *Acta Pediatr* 86:963-968.1997.
- 11) Brooke H, Gibson A, Tappin D, et al. Case-control study of sudden infant death syndrome in Scotland, 1992-5. *BMJ* 314:1516-1520.1997.
- 12) Schellscheidt J, Ott A, G Jorch. Epidemiological features of sudden infant death after a German intervention campaign in 1992. *Eur J Pediatr* 156:655-660.1997.

表 I-1 地域別回答組数

地 域	調査対象組数	有効回答組数	有効回答割合(%)
北海道	40	10	(25.0%)
東 北	59	29	(49.2%)
関 東	237	99	(41.8%)
中 部	168	98	(58.3%)
近 畿	120	32	(26.7%)
中 国	50	32	(64.0%)
四 国	28	8	(28.6%)
九州・沖縄	135	69	(51.1%)
合 計	837	377	(45.0%)

表 I-2 県別回答組数

地 域(県)	調査対象組数	有効回答組数	有効回答割合(%)
北海道	40	10	(25.0%)
青森	8	8	(100.0%)
岩手	9	5	(55.6%)
宮城	11	3	(27.3%)
秋田	4	3	(75.0%)
山形	6	4	(66.7%)
福島	21	6	(28.6%)
茨城	17	9	(52.9%)
栃木	19	6	(31.6%)
群馬	23	13	(56.5%)
埼玉	49	25	(51.0%)
千葉	35	21	(60.0%)
東京	62	15	(24.2%)
神奈川	32	10	(31.3%)
新潟	16	8	(50.0%)
富山	6	3	(50.0%)
石川	8	4	(50.0%)
福井	11	8	(72.7%)
山梨	8	5	(62.5%)
長野	9	6	(66.7%)
岐阜	19	12	(63.2%)
静岡	24	15	(62.5%)
愛知	67	37	(55.2%)
三重	11	0	(0.0%)
滋賀	9	3	(33.3%)
京都	18	0	(0.0%)
大阪	38	14	(36.8%)
兵庫	37	13	(35.1%)
奈良	5	2	(40.0%)
和歌山	2	0	(0.0%)
鳥取	2	2	(100.0%)
鳥根	11	6	(54.5%)
岡山	15	9	(60.0%)
広島	18	12	(66.7%)
山口	4	3	(75.0%)
徳島	1	1	(100.0%)
香川	7	7	(100.0%)
愛媛	13	0	(0.0%)
高知	7	0	(0.0%)
福岡	41	22	(53.7%)
佐賀	5	3	(60.0%)
長崎	22	4	(18.2%)
熊本	19	12	(63.2%)
大分	3	1	(33.3%)
宮崎	11	7	(63.6%)
鹿児島	13	10	(76.9%)
沖縄	21	10	(47.6%)
合 計	837	377	(45.0%)

表 I-3 性別

性 別	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
男	223	(59.2%)	223	(59.2%)
女	154	(40.8%)	154	(40.8%)

表 I-4-1 調査対象とした年月齢

		例数	構成割合(%)
出生～満	1ヵ月未満	36	(9.5%)
1ヵ月ちょうど～満	2ヵ月未満	45	(11.9%)
2ヵ月ちょうど～満	3ヵ月未満	56	(14.9%)
3ヵ月ちょうど～満	4ヵ月未満	33	(8.8%)
4ヵ月ちょうど～満	5ヵ月未満	51	(13.5%)
5ヵ月ちょうど～満	6ヵ月未満	40	(10.6%)
6ヵ月ちょうど～満	7ヵ月未満	22	(5.8%)
7ヵ月ちょうど～満	8ヵ月未満	19	(5.0%)
8ヵ月ちょうど～満	9ヵ月未満	17	(4.5%)
9ヵ月ちょうど～満	10ヵ月未満	11	(2.9%)
10ヵ月ちょうど～満	11ヵ月未満	6	(1.6%)
11ヵ月ちょうど～満	1歳0ヵ月未満	5	(1.3%)
1歳0ヵ月ちょうど～満	1歳6ヵ月未満	19	(5.0%)
1歳6ヵ月ちょうど～満	2歳0ヵ月未満	7	(1.9%)
2歳0ヵ月ちょうど～満	2歳6ヵ月未満	5	(1.3%)
2歳6ヵ月ちょうど～満	3歳0ヵ月未満	4	(1.1%)
3歳0ヵ月ちょうど～満	3歳6ヵ月未満	0	(0.0%)
3歳6ヵ月ちょうど～満	4歳0ヵ月未満	0	(0.0%)
4歳0ヵ月ちょうど～満	4歳6ヵ月未満	0	(0.0%)
4歳6ヵ月ちょうど～満	5歳0ヵ月未満	0	(0.0%)
5歳0ヵ月ちょうど～満	5歳6ヵ月未満	1	(0.3%)
合 計		377	(100.0%)

表 I-4-2 死亡児と対照児の生年月日の日差

生年月日の日差	組数	割合(%)
0	180	(47.7%)
1	64	(17.0%)
2	25	(6.6%)
3	13	(3.4%)
4	17	(4.5%)
5	12	(3.2%)
6	7	(1.9%)
7	7	(1.9%)
8	5	(1.3%)
9	8	(2.1%)
10	3	(0.8%)
11	3	(0.8%)
13	8	(2.1%)
14	2	(0.5%)
15	5	(1.3%)
16	4	(1.1%)
17	1	(0.3%)
18	1	(0.3%)
19	1	(0.3%)
21	1	(0.3%)
22	3	(0.8%)
23	2	(0.5%)
27	1	(0.3%)
28	1	(0.3%)
29	1	(0.3%)
31	2	(0.5%)
合 計	377	(100.0%)

表 I-7 解剖の有無

	実 数	構成割合(%)
解剖有	95	(25.2%)
解剖なし	277	(73.5%)
不明	5	(1.3%)
合 計	377	(100.0%)

表 I-8 死亡月

死亡月	実 数	構成割合(%)
平成8年 1月	19	(5.0%)
2月	30	(8.0%)
3月	19	(5.0%)
4月	25	(6.6%)
5月	18	(4.8%)
6月	14	(3.7%)
7月	11	(2.9%)
8月	13	(3.4%)
9月	11	(2.9%)
10月	17	(4.5%)
11月	20	(5.3%)
12月	29	(7.7%)
平成9年 1月	25	(6.6%)
2月	29	(7.7%)
3月	17	(4.5%)
4月	38	(10.1%)
5月	23	(6.1%)
6月	19	(5.0%)
合 計	377	(100.0%)

表 I-5 出生体重

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
~1500 g 未満	18	(4.8%)	4	(1.1%)
1500~2000 g 未満	16	(4.2%)	6	(1.6%)
2000~2500 g 未満	46	(12.2%)	17	(4.5%)
2500~3000 g 未満	137	(36.3%)	136	(36.1%)
3000~3500 g 未満	120	(31.8%)	166	(44.0%)
3500 g ~	40	(10.6%)	48	(12.7%)
合 計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表 I-6 在胎週数

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
24~27週	7	(1.9%)	2	(0.5%)
28~31週	14	(3.7%)	2	(0.5%)
32~35週	20	(5.3%)	8	(2.1%)
36~39週	222	(58.9%)	214	(56.8%)
40~43週	113	(30.0%)	151	(40.1%)
無 回 答	1	(0.3%)	0	(0.0%)
合 計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表 I-9 死亡時刻

午前	実数		午後	実数	
	構成割合(%)			構成割合(%)	
0	9	(2.4%)	12	7	(1.9%)
1	14	(3.7%)	1	23	(6.1%)
2	24	(6.4%)	2	19	(5.0%)
3	20	(5.3%)	3	11	(2.9%)
4	13	(3.4%)	4	18	(4.8%)
5	20	(5.3%)	5	17	(4.5%)
6	18	(4.8%)	6	16	(4.2%)
7	23	(6.1%)	7	12	(3.2%)
8	28	(7.4%)	8	6	(1.6%)
9	16	(4.2%)	9	7	(1.9%)
10	18	(4.8%)	10	10	(2.7%)
11	16	(4.2%)	11	10	(2.7%)
午前合計	219(58.1%)		午後合計	156(41.4%)	
無回答2例 (0.5%)					

表 I-10 栄養方法

栄養方法	死亡児(SIDS)		対照児	
	実数	構成割合(%)	実数	構成割合(%)
母乳栄養	80	(21.2%)	148	(39.3%)
混合栄養	118	(31.3%)	105	(27.9%)
人工栄養	155	(41.1%)	100	(26.5%)
その他	23	(6.1%)	24	(6.4%)
無回答	1	(0.3%)	0	(0.0%)
合計	377(100.0%)		377(100.0%)	

表 I-11 発育状態

発育状態	死亡児(SIDS)		対照児	
	実数	構成割合(%)	実数	構成割合(%)
問題なし	271	(71.9%)	329	(87.3%)
何か言われたことがある	95	(25.2%)	42	(11.1%)
無回答	11	(2.9%)	6	(1.6%)
合計	377(100.0%)		377(100.0%)	

表 I-12 習慣的喫煙

習慣的喫煙	死亡児(SIDS)		対照児	
	実数	構成割合(%)	実数	構成割合(%)
習慣的喫煙あり	父母とも	86(22.8%)	30(8.0%)	
	父のみ	187(49.6%)	214(56.8%)	
	母のみ	6(1.6%)	5(1.3%)	
父母共に習慣的喫煙なし	92	(24.4%)	125	(33.2%)
無回答	6	(1.6%)	3	(0.8%)
合計	377(100.0%)		377(100.0%)	

表 I-13 頷定 (首すわり)

頷定の有無	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
0ヵ月	36	(9.5%)	29	(7.7%)
1ヵ月以上				
はい	226	(59.9%)	253	(67.1%)
いいえ	112	(29.7%)	94	(24.9%)
無回答	3	(0.8%)	1	(0.3%)
合計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表 I-14 首すわり時期 (回答がはいのものの内訳)

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
2ヵ月	41	(18.1%)	28	(11.1%)
3ヵ月	119	(52.7%)	156	(61.7%)
4ヵ月	46	(20.4%)	59	(23.3%)
5ヵ月	10	(4.4%)	6	(2.4%)
6ヵ月	1	(0.4%)	1	(0.4%)
7ヵ月	1	(0.4%)	0	(0.0%)
8ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
9ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
10ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
11ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
12ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
13ヵ月以上	1	(0.4%)	0	(0.0%)
無回答	7	(3.1%)	3	(1.2%)
計	226	(100.0%)	253	(100.0%)

表 I-15 寝返りの有無

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
自由にできていた	110	(29.2%)	132	(35.0%)
でき始めであった	44	(11.7%)	35	(9.3%)
亡くなった時が初めてであった	3	(0.8%)	—	—
まだできなかった	218	(57.8%)	208	(55.2%)
無回答	2	(0.5%)	2	(0.5%)
合 計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表 I-16 寝返りの時期 (回答が自由にできていたのものの内訳)

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
～4ヵ月未満	17	(15.5%)	6	(4.5%)
4ヵ月	19	(17.3%)	37	(28.0%)
5ヵ月	22	(20.0%)	38	(28.8%)
6ヵ月	35	(31.8%)	36	(27.3%)
7ヵ月	9	(8.2%)	10	(7.6%)
8ヵ月	1	(0.9%)	1	(0.8%)
9ヵ月	1	(0.9%)	0	(0.0%)
10ヵ月	1	(0.9%)	1	(0.8%)
11ヵ月	1	(0.9%)	0	(0.0%)
12ヵ月	0	(0.0%)	0	(0.0%)
無回答	4	(3.6%)	3	(2.3%)
合 計	110	(100.0%)	132	(100.0%)

表I-17 普段の寝かせ方

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
うつぶせ寝	98	(26.0%)	58	(15.4%)
あおむけ寝	229	(60.7%)	286	(75.9%)
横向き	7	(1.9%)	6	(1.6%)
一定せず	37	(9.8%)	24	(6.4%)
その他	4	(1.1%)	2	(0.5%)
無回答	2	(0.5%)	1	(0.3%)
合計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表I-18 寝方を自身で変えることの有無

	死亡児(SIDS)		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
ほとんど変えなかつた	224	(59.4%)	206	(54.6%)
変えることがあつた	65	(17.2%)	93	(24.7%)
よく変えた	62	(16.4%)	56	(14.9%)
その他	20	(5.3%)	19	(5.0%)
無回答	6	(1.6%)	3	(0.8%)
合計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表I-19 部屋の室温

	死 亡 児		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
高かつた	11	(2.9%)	10	(2.7%)
やや高かつた	45	(11.9%)	88	(23.3%)
同じ	252	(66.8%)	242	(64.2%)
低かつた	31	(8.2%)	25	(6.6%)
その他	23	(6.1%)	8	(2.1%)
覚えていない	11	(2.9%)	3	(0.8%)
無回答	4	(1.1%)	1	(0.3%)
合計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表I-20 衣類や寝具類

	死 亡 児		対 照 児	
	実 数	構成割合(%)	実 数	構成割合(%)
厚着だった	10	(2.7%)	9	(2.4%)
やや厚着だった	43	(11.4%)	58	(15.4%)
同じ	238	(63.1%)	174	(46.2%)
薄着だった	67	(17.8%)	125	(33.2%)
その他	11	(2.9%)	6	(1.6%)
覚えていない	5	(1.3%)	4	(1.1%)
無回答	3	(0.8%)	1	(0.3%)
合計	377	(100.0%)	377	(100.0%)

表 I-21 死亡した日の就寝時の寝かせ方

	実数	構成割合(%)
うつぶせ寝	128	(34.0%)
あおむけ寝	215	(57.0%)
横向き	10	(2.7%)
覚えていない	9	(2.4%)
その他	9	(2.4%)
無回答	6	(1.6%)
合計	377	(100.0%)

表 I-22 死亡当日または数日前よりの変化

	実数	構成割合(%)
はい	200	(53.1%)
寝かせ方を変えた	14	(3.7%)
哺乳力が弱かった	26	(6.9%)
活気が弱かった	18	(4.8%)
下痢をしていた	12	(3.2%)
発熱していた	26	(6.9%)
鼻閉	16	(4.2%)
風邪気味だった	87	(23.1%)
その他	103	(27.3%)
無回答	5	(1.3%)
いいえ	171	(45.4%)
無回答	6	(1.6%)
合計	377	(100.0%)

(複数回答あり)

表 I-23 異常発見場所

	実数	構成割合(%)
自宅	307	(81.4%)
保育所・託児所	19	(5.0%)
その他	49	(13.0%)
無回答	2	(0.5%)
合計	377	(100.0%)

表 I-24 異常発見時の体位

	実数	構成割合(%)
うつぶせ	180	(47.7%)
あおむけ	147	(39.0%)
横向き	14	(3.7%)
覚えていない	13	(3.4%)
その他	19	(5.0%)
無回答	4	(1.1%)
合計	377	(100.0%)

表Ⅱ-1 出生体重

		対 照 児		マクネマー 検定統計量
		2499 g 以下	2500 g 以上	
死亡 児	2499 g 以下	13	67	$\chi^2=33.383$ P<0.001
	2500 g 以上	14	283	

		対 照 児		
		あおむけ 以外	あおむけ	
死亡 児	あおむけ 以 外	43	97	$\chi^2=18.317$ P<0.001
	あおむけ	45	186	

表Ⅱ-2 在胎週数

		対 照 児		
		36週以下	37週以上	
死亡 児	36週以下	7	51	$\chi^2=19.938$ P<0.001
	37週以上	14	304	

		対 照 児		
		横向き	あおむけ	
死亡 児	横向き	0	5	$\chi^2=0.000$ NS
	あおむけ	4	186	

表Ⅱ-3-a 普段の寝かせ方

		対 照 児		
		うつぶせ	あおむけ	
死亡 児	うつぶせ	20	66	$\chi^2=11.112$ P<0.001
	あおむけ	32	186	

表Ⅱ-3-b 死亡した日の寝かせ方

		対 照 児		
		うつぶせ	あおむけ	
死亡 児	うつぶせ	25	90	$\chi^2=29.008$ P<0.001
	あおむけ	30	168	

		対 照 児		
		うつぶせ 横向き	一定せず あおむけ	
死亡 児	うつぶせ 横向き	24	79	$\chi^2=12.134$ P<0.001
	一定せず あおむけ	40	228	

		対 照 児		
		うつぶせ	うつぶせ 以外	
死亡 児	うつぶせ	25	90	$\chi^2=27.802$ P<0.001
	うつぶせ 以外	31	177	

		対 照 児		
		うつぶせ	うつぶせ以外	
死亡 児	うつぶせ	20	76	$\chi^2=12.009$ P<0.001
	うつぶせ 以外	38	235	

		対 照 児		
		あおむけ 以外	あおむけ	
死亡 児	あおむけ 以外	39	99	$\chi^2=19.507$ P<0.001
	あおむけ	45	168	

		対 照 児		
		うつぶせ 一定せず	横向き あおむけ	
死亡 児	うつぶせ 一定せず	39	94	$\chi^2=18.248$ P<0.001
	横向き あおむけ	43	193	

表II-4 栄養方法

		対 照 児		
		人工	母乳	
死亡児	人工	56	58	$\chi^2=28.929$ P<0.001
	母乳	12	41	

		対 照 児		
		人工・混合	母乳	
死亡児	人工・混合	163	103	$\chi^2=30.179$ P<0.001
	母乳	37	41	

		対 照 児		
		人工	母乳・混合	
死亡児	人工	56	95	$\chi^2=20.654$ P<0.001
	母乳・混合	41	152	

表II-5 両親の習慣的喫煙の有無

		対 照 児		
		父母共喫煙有り	父母共喫煙なし	
死亡児	父母共喫煙有り	12	28	$\chi^2=12.971$ P<0.001
	父母共喫煙なし	6	37	

		対 照 児		
		少なくとも父母のいずれかに喫煙有り	父母共喫煙なし	
死亡児	少なくとも父母のいずれかに喫煙有り	191	87	$\chi^2=7.262$ P<0.01
	父母共喫煙なし	54	37	

		対 照 児		
		父のみ	なし	
死亡児	父のみ	115	58	$\chi^2=1.398$ NS
	なし	45	37	

		対 照 児		
		母のみ	なし	
死亡児	母のみ	0	1	$\chi^2=0.250$ NS
	なし	3	37	

表II-6 寝返りの有無

		対 照 児		
		自由にできる	できはじめ まだ	
死亡児	自由にできる	92	18	$\chi^2=7.603$ P<0.01
	できはじめ・ まだ	40	223	

		対 照 児		
		高かった	それ以外	
死亡児	高かった	3	8	$\chi^2=0.071$ NS
	それ以外	6	317	

		対 照 児		
		自由にできる できはじめ	まだ	
死亡児	自由にできる できはじめ	128	29	$\chi^2=1.191$ NS
	まだ	39	177	

		対 照 児		
		高かった やや高め	低かった	
死亡児	高かった やや高め	27	4	$\chi^2=3.765$ NS
	低かった	13	3	

表II-7 寝方を自身で変えることの有無

		対 照 児		
		ほとんど変えな かった	変えることが有 った・よく変え た	
死亡児	ほとんど変え なかった	160	60	$\chi^2=5.510$ P<0.05
	変えること有 った・よく変 えた	36	89	

		対 照 児		
		高かった やや高め	それ以外	
死亡児	高かった やや高め	27	29	$\chi^2=10.112$ P<0.001
	それ以外	60	218	

		対 照 児		
		ほとんど変えない 変えること有った	よく変えた	
死亡児	ほとんど変えない・ 変えること有 った	256	27	$\chi^2=0.417$ NS
	よく変えた	33	29	

		対 照 児		
		高かった やや高め 同じ	低かった	
死亡児	高かった やや高め 同じ	282	21	$\chi^2=0.735$ NS
	低かった	28	3	

表II-8 部屋の室温

		対 照 児		
		高かった	同じ 低かった	
死亡児	高かった	3	5	$\chi^2=0.125$ NS
	同じ 低かった	3	218	

表Ⅱ-9 衣類や寝具類

		対 照 児	
		厚着	同じ・薄着
死亡児	厚着	0	10
	同じ・薄着	8	302

$\chi^2=0.056$
NS

		対 照 児	
		厚着	それ以外
死亡児	厚着	0	10
	それ以外	9	33

$\chi^2=0.000$
NS

		対 照 児	
		厚着 やや厚着	薄着
死亡児	厚着 やや厚着	8	17
	薄着	12	33

$\chi^2=0.552$
NS

		対 照 児	
		厚着 やや厚着	それ以外
死亡児	厚着 やや厚着	8	45
	それ以外	57	242

$\chi^2=1.186$
NS

		対 照 児	
		厚着 やや厚着 同じ	薄着
死亡児	厚着 やや厚着 同じ	198	88
	薄着	33	33

$\chi^2=24.009$
P < 0.001

表Ⅲ SIDSに関するマッチドペア検定およびオッズ比の主な結果 (N=377)

項目	要因あり	要因なし	マクネマー 検定統計量	オッズ比	信頼区間(95%)	有意水準
出生体重	2499 g 以下	2500 g 以上	33.383	4.786	2.810~8.898	***
妊娠期間	36週以下	37週以上	19.938	3.643	2.113~6.887	***
普段の寝かせ方	うつぶせ	あおむけ	11.112	2.063	1.386~3.216	***
	うつぶせ	うつぶせ以外	12.009	2.000	1.384~3.008	***
	あおむけ以外	あおむけ	18.317	2.156	1.540~3.118	***
当日の寝かせ方	うつぶせ	あおむけ	29.008	3.000	2.031~4.635	***
	うつぶせ	うつぶせ以外	27.802	2.903	1.974~4.460	***
	あおむけ以外	あおむけ	19.507	2.200	1.573~3.178	***
栄養方法	人工	母乳	28.929	4.833	2.731~9.477	***
	人工・混合	母乳	30.179	2.784	1.949~4.126	***
	人工	母乳・混合	20.654	2.317	1.636~3.398	***
習慣的喫煙	父母共に喫煙あり	父母共に喫煙なし	12.971	4.667	2.141~12.540	***
	少なくとも父母の いずれか喫煙有り	父母共に喫煙なし	7.262	1.611	1.166~2.294	**
部屋の室温	高かった	同じ・低かった	0.125	1.667	0.552~8.765	ns
	高かった	それ以外	0.071	1.333	0.553~4.315	ns
	高かった・やや高 め	低かった	3.765	0.308	0.128~1.0.10	ns
	高かった・やや高 め	それ以外	10.112	0.483	0.320~0.768	***
衣類や寝具	厚着	同じ・薄着	0.056	1.250	0.566~3.463	ns
	厚着	それ以外	0.000	1.111	0.514~2.966	ns
	厚着・やや厚着	薄着	0.552	1.417	0.735~3.151	ns
	厚着・やや厚着	それ以外	1.186	0.789	0.546~1.187	ns

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05

乳幼児突然死症候群(SIDS)

に関する調査用紙

担当保健所名：

(都・道・府・県・市・区)

保健所

死亡児

担当保健婦名：

記入年月日：平成10年 月 日

対照児

担当保健婦名：

記入年月日：平成10年 月 日

○本調査の照会先

厚生省心身障害研究「乳幼児死亡防止に関する研究」

事務局 国立公衆衛生院 母子保健学部

TEL. 03-3441-7111 担当：加藤（内線297） 斉藤（内線292）

FAX. 03-3446-6495

死亡児用

F. フェイスシート (F1～F6については死亡児例リストより転記する。リスト上に記載がない場合は聞き取る)

サンプルNO (死亡児例リストの先頭の数字を転記する)			
F1. 性別	1. 男 2. 女	F2. 生年月日	平成 年 月 日
F3. 出生体重	g	F4. 在胎週数	週 日
F5. 解剖の有無	1. あり 2. なし 3. 不明 4. その他 ()	F6. 死亡 年月日 ・時刻	平成 年 月 日 1. 午前 2. 午後 時 分頃

F7. 栄養方法

1. 母乳 2. 人工 3. 混合 4. その他 ()

F8. 今までの発育状態

1. 問題なし 2. 何か言われたことがある ()

F9. お子さんを妊娠してからの両親の習慣的喫煙の有無

あり→ (1. 父 2. 母 3. 父母共) 4. なし

Q1. お子さんの普段の状況についておたずねします

①首は座っていましたか

1. はい → 生後 カ月頃
2. いいえ

②寝返りはしていましたか:

1. 自由にできていた → (生後 カ月頃より)
2. できはじめであった
3. その時 (亡くなった時) が初めてであった 4. まだできなかった

③普段の寝かせ方はどうでしたか。

1. うつぶせ 2. あおむけ 3. 横向き 4. 一定せず
5. その他 ()

④お子さんは寝方を自身で変えることができましたか。

1. ほとんど変えなかった 2. 変えることがあった
3. よく変えた 4. その他 ()

Q2. お子さんが亡くなられた日の状況についておたずねします

①就寝時の寝かせ方はどうでしたか。

1. うつぶせ 2. あおむけ 3. 横向き
4. 覚えていない 5. その他 ()

②当日または数日前よりいつもと違っていたことがありましたか。(複数回答可)

1. はい → 1. 寝かせ方を変えた 2. 哺乳力が弱かった 3. 活気が弱かった
4. 下痢をしていた 5. 発熱していた 6. 鼻閉
7. 風邪がみであった 8. その他 ()

2. いいえ

③当日お子さんのいた部屋の室温は他の部屋に比べてどうでしたか。

1. 高かった 2. やや高めだった 3. 同じ
4. 低かった 5. その他 () 6. 覚えていない

④お子さんが身にまとっていたもの（衣類や寝具類）は大人が着ていたものに比べどうでしたか。

1. 厚着だった 2. やや厚着だった 3. 同じ
4. 薄着だった 5. その他（ ） 6. 覚えていない

Q3. お子さんの異常に気がついた時の状況についておたずねします

①発見場所

1. 自宅（家族の目のつくところ、目のつきにくいところ）
2. 保育所・託児所 3. その他（ ）

②発見時の体位はどうでしたか。

1. うつぶせ 2. あおむけ 3. 横向き
4. 覚えていない 5. その他（ ）

◎保健婦さんの記入欄（何もなければ結構です。）

①保護者に対して何か支援が必要と思われましたか。

1. 乳幼児突然死症候群の詳しい説明 2. 両親への精神的なサポート
3. 次回出産へのサポート 4. その他（ ）

②乳幼児突然死症候群の今後の保健指導等について何か意見がありますか。

③保護者が何か行政に望んでいたことがありましたか。

対照児用

年 月 (歳 カ月時) の頃の状況についておたずねします。

(死亡時例リストから対応する死亡児例の死亡年月を転記する)

F. フェイスシート (F1~F4については作成した名簿より転記する)

F1. 性別	1. 男 2. 女	F2. 生年月日	平成 年 月 日
F3. 出生体重	g	F4. 在胎週数	週 日

F5. 栄養方法

1. 母乳 2. 人工 3. 混合 4. その他 ()

F6. 今までの発育状態

1. 問題なし 2. 何か言われたことがある ()

F7. お子さんを妊娠してからの両親の習慣的喫煙の有無

- あり→ (1. 父 2. 母 3. 父母共) 4. なし

Q1. その頃のお子さんの状態についておたずねします

①首は座っていましたか

1. はい → 生後 カ月頃
2. いいえ

②寝返りはしていましたか

1. 自由にできていた → (生後 カ月頃より)
2. できはじめであった
3. まだできなかった

③普段の寝かせ方はどうでしたか。

1. うつぶせ 2. あおむけ 3. 横向き 4. 一定せず
5. その他 ()

④お子さんは寝方を自身で変えることがありましたか。

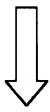
1. ほとんど変えなかった 2. 変えることがあった
3. よく変えた 4. その他 ()

⑤普段お子さんのいた部屋の室温は他の部屋に比べてどうでしたか。

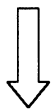
1. 高かった 2. やや高めだった 3. 同じ
4. 低かった 5. その他 () 6. 覚えていない

⑥お子さんが身にまとっていたもの (衣類や寝具類) は大人が着ていたものに比べどうでしたか。

1. 厚着だった 2. やや厚着だった 3. 同じ
4. 薄着だった 5. その他 () 6. 覚えていない



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳幼児突然死症候群(SIDS)の育児環境因子を明らかにするために総務庁より人口動態調査票の目的外使用許可を得て、SIDS 児およびその対照児に対し、平成 10 年 1 月から 2 月末にかけて全国で保健婦による聞き取り調査を行った。

その結果、死亡児(SIDS)は対照児に比べ次の育児環境因子で発生率が有意に高いことが明らかになった。寝かせ方については、うつぶせ寝があおむけ寝に比べ高く、そのオッズ比は 3.00($P<0.001$, 95%信頼区間 2.03~4.64)であった。栄養方法については、人工栄養児が母乳栄養児に比べ高く、そのオッズ比は 4.83($P<0.001$, 95%信頼区間 2.73~9.48)であった。喫煙については、両親が喫煙していると高く、そのオッズ比は 4.67($P<0.001$, 95%信頼区間 2.14~12.54)であった。

今回の調査結果より、SIDS はうつぶせ寝、人工栄養児、両親の喫煙により 3.00~4.83 倍多く発生すると結論された。